

令和2年度 第1回総合教育会議 議事録

日時：令和2年6月26日（金）10：00～11：30

場所：佐世保市役所5階 庁議室

出席者：朝長佐世保市長、西本教育長、中島教育長職務代理者、合田教育委員、内海教育委員、萩原教育委員

事務局：山元教育総務部長兼新しい学校推進室長、陣内学校教育部長兼学校教育課長、渡辺子ども未来部長、松尾総務課長、杉本社会教育課長

【議事録】

【朝長市長】

教育委員会事務局からお願いしたいと思います。

【山元教育総務部長兼新しい学校推進室長】

教育総務部長、山元でございます。本日は大変お疲れさまでございます。

私のほうから、成年年齢引き下げに伴う成人式典の在り方について、概略をご説明させていただきます。失礼して着座にて説明させていただきます。

資料はお配りのとおりでございますが、この件につきましては、成年年齢を20歳から18歳に引き下げる民法の一部を改正する法律が平成30年6月に成立をいたしまして、令和4年4月に施行されることとなっております。これに伴い、現在、全国的に成人式典の取扱いが検討されており、本市におきましても、これまで教育委員会が所管し、成人教育の一環として行ってまいりました成人式典につきまして、その対象年齢をどのようにするかを含め検討を進めているところでございます。

検討に当たりましては、これまで市民へのwebアンケートや本年1月に開催した成人式典参加者へのアンケートの実施、また、本年3月には社会教育委員の会議で諮問を行いまして、先月答申を頂いたところでございます。

本日は、その結果等を踏まえ、令和4年度以降の佐世保市成人式典の対象年齢や今後の式典運営について、ご協議をお願いしたいと考えているところでございます。

詳細につきましては、担当の課長のほうからご説明いたしますので、よろしくご願ひいたします。

【杉本社会教育課長】

社会教育課長です。

それでは、これまでの検討経緯を中心に説明させていただきます。資料は1ページ目をご覧ください。

まず、成年年齢が引き下げられた背景の確認です。平成28年6月施行の選挙権年齢の引下げや若者の自己決定権の尊重、積極的な社会参加促進などの意義から、令和4年4月施行として民法改正が行われたもので、一人で有効な契約をすることができる、親権に服することがなくなる年齢である成年年齢が二十歳から18歳に引き下げられたというものです。

しかしながら、今回の改正で、18歳で全ての権利が与えられたわけではありませんが、若年者を特定の悪影響から守るため、飲酒やギャンブルについては、現行どおり二十歳基準を維持するという整理がなされており、全てが可能となるのは、これまでどおり二十歳ということになります。

続いて、県内自治体の検討状況ですが、長崎、大村、島原の3市については二十歳で開催する方針で検討されておりまして、本年度公表予定ということでございます。なお、中核市を対象とした成年年齢の引下げに伴う成人式の在り方アンケートの結果が昨日手元に届きましたが、回答のありました全56自治体のうち、二十歳になる年度に開催することが決定している自治体は53.6%を占める30自治体でございました。

それでは、資料の2ページをお開きください。

ここではアンケート等の結果を見ていきます。

まず一つ目、法務省の成人式の時期や在り方等に関する分科会が令和元年6月に自治体向けに実施した調査です。回答のありました1,037自治体のうち、対象年齢を決定している自治体は67自治体、そのうち61自治体は二十歳で開催、2自治体のみが18歳で開催となっております。

現在と変わらず二十歳とした自治体の理由としましては、一番多かったのが、18歳の1月に実施すると受験と重なり、出席者が減少するからという理由。そのほか、民法の成年年齢と必ずしも一致させる必要がないからなどの理由でございました。

一方、18歳開催を決定した自治体におかれましては、成年年齢が18歳に引き下げられたから、そして法律上、大人として扱われることになる年齢の前後で成人式をすることにより、若者の自覚を促すことができるからという理由でございました。

続いて、2番目、3番目でございます。本紙で実施しましたアンケートの結果です。

まず、昨年8月にホームページ上で実施しましたwebアンケートでは、回答数747名のうち、40歳から50歳代が約半分を占めておりましたが、これまでどおり二十歳で開催したいという方が391名と、52%を占めております。

次に、本年1月に実施しました成人式典時に参加者に実施した成人式典出席者アンケートでは、今までどおり二十歳での開催という方が287名と、80%を占めております。主な理由としましては、18歳開催はセンター試験と重なるから、また、卒業式と同じではないか、伝統は守ったほうがよい、式後に20歳未満で飲酒する人も出てくるかもしれないという意見でございました。一方、18歳を選択した方の理由としましては、成人としての権利、義務が生まれることを自覚するためや成人になった年に式典があったほうが実感が湧くといったものでございました。

以上のとおり、アンケートの結果からは、二十歳での開催を希望する方が多いという傾向が見えた結果となりました。

続いて、4番目、社会教育委員の会への諮問、答申についてご説明いたします。

本年3月24日に開催しました社会教育委員の会で諮問をいたしまして、会中にご議論いただいた結果、先月5月19日に答申を頂いております。

答申の内容は3点となります。

まず一つ目、今までどおり二十歳という節目の年に式典を行うことが望ましいというものでございます。この理由としましては、18歳で式典実施の場合、大学受験や就職等が差し迫った時期で余裕がなく、保護者も経済的に負担が大きいこと、親元やふるさとを離れた後で、自らを振り返る意味としても二十歳が望ましいというものでございました。

2点目としまして、今まで使用してきた成人式典の名称変更を検討すること。

そして3点目として、実施に当たっては成人となることの意味を考え、郷土愛を育むような式典内容となるよう努めることという答申を頂いております。

資料は3ページ目をお開きください。

ここまで説明しましたアンケート結果及び答申内容を鑑みますと、対象年齢をこれまでどおり二十歳とする開催の方向となりますが、そうなった場合、今後、式典開催に向け、主に次の3点についての検討が必要になると考えております。

まず、1点目、成人式典の名称をどうするか。

2点目、成年となる18歳に成人となる自覚を促す必要があるのではないか。

そして3点目、成年年齢である18歳で開催しないからこそ、成人式典が何のために開催されているのかの目的を改めて考え、それを生かした式典とする必要があるのではないかとございます。

6番目に、今後のスケジュールとしまして、案を記載しております。本日の協議を受けまして、今後は本年8月をめどに方針を決定する予定としております。先ほど申し上げました3点の論点につきましても、方針決定後、令和5年1月開催の成人式典開催に向け、引き続き検討を進めていきたいとしております。

説明は以上でございまして、ご意見等よろしく願いたします。

【朝長市長】

ありがとうございました。教育委員の皆さんも、それぞれの立場からの思いや考えというものをもちではないかと思えます。委員の皆様のご意見をお聞かせいただきたいと思えます。それぞれにお願いしたいと思えます。あまり時間もございませんので、3分から5分ぐらいの間でお願いをしたいと思います。

まずは中島委員、学校の現場ということでお願いいたします。

【中島教育長職務代理者】

おはようございます。まずをもちまして、一昨日来の未曾有と申しますか、大雨災害の対策で対応と申しますか、市長様はじめ、関係当局の皆様方、大変今日はお疲れのところだと思えますけれども、どうぞよろしくお願ひしたいと思えます。

一つ目の議題であります成人式典の在り方につきましてですけれども、結論から申しますと、私もそのまま20歳の開催でいいのかなと思えます。先ほど事務局からありました、ほかの自治体の状況でありますとか、もろもろのアンケート、そして、先ほども紹介がありました社会教育委員会の審議の中でも、18歳にした場合の課題と申しますか、もろもろの影響も出てきますので、総合的に判断した場合には20歳のほうがいいのかなと思えました。

また、アンケートの中にもあったのですけれども、仮に令和4年度から18歳に変更した場合に、その年に20歳と19歳になる年が2年間出てきますので、その年度の取扱いも結構大変なのかな、難しいのかなという気がしております。

先月のこの定例の教育委員会でも話題になったんですけれども、委員の皆さん方もそういった意見が多かったように記憶をしております。私自身も一昨年からの教育委員という立場から式典に参加をさせていただいていますが、一昔に比べたら、一触即発と申しますか、そういった緊迫感というのはなくなったと感じております。特に開場前の新成人たちというのは、おおむね穏やかな表情で、整然とした雰囲気ですべて式典に臨んでいます。相変わらず会場に入らなく、時折、目立って奇抜なパフォーマンスをしたり、それを取り巻く面々はいますけれども、これも以前と比べるとおとなしくなったなと感じています。

これは、現在の新成人が主体的に実行委員として企画運営する式典形式が定着して、参加者の当事者意識と申しますか、共感性が高まったことが挙げられるのではないかと思います。

また当日は、式典後に出身の小中学校でありますとか、高校別に同窓会を組んでいるようで、この日のアンケートにもあるように、久しぶりにみんなで集まる楽しみな記念日になっているというようです。和やかになったと思っております。

私事で恐縮ですけれども、ここ数年は、最後に勤めさせていただいた学校の子

供たちが続々と式典に集まってくれる年代になりまして、声をかけてくれております。また、ありがたいことに夕方からの同窓会にも誘ってもらって、楽しいひとときを過ごさせていただいているところですが、Society 5.0であるとか、スーパーシティであるといった、新時代を切り開いていく新成人たちです。毎年この記念日には、特にたくましく成長した若者たちと、全く異次元の感覚で、話はほとんどかみ合わないのですけれども、人と語る空間を共有できるということは、ほんとうに僕にとってはまさに至福の瞬間です。

今後の課題としては、先ほどもありましたように、名称の変更でありますとか、式典の参加率等もアンケートのところにもありましたけれども、今後も広く意見を聞きながら、よりよいものにしていただければなと思っております。

ただ、最後にやはり気になるのは、来年の式典のコロナの影響がということで、状況によっては分散開催であるとか、リモート等というものもあるのかなと思えますけれども、いずれにせよ新成人を祝う思い出深い式典になればな願っています。

以上です。

【朝長市長】

ありがとうございました。それでは、合田委員、お願いいたします。

【合田教育委員】

今、中島先生のほうから、今年の成人式に対する不安をお聞きしましたが、まさに今度の成人式は私の長男がちょうど成人式を迎えるもので、親としてはほんとうにやきもきと今過ごしているところでございます。

今後の成人式の在り方について結論を申しますと、私もやはり今までと同じように二十歳で開催するのが望ましいと思います。

一番の理由は、昨年、我が子の初めての大学受験を経験いたしまして、やはり成人式典と大学受験の時期が重なるというのは、親子ともに非常に心身ともに負担が大きくなるということが一番の懸念材料でございます。また、成人年齢が18歳に引き下げられたとしても、この資料にもありますように、飲酒ですとか喫煙、あとは競馬、競輪、オートレースへの参加ですね。そして、養子を迎えるということもやはり二十歳でしかできない、親としてきちんと責任を持った社会人になるということもまだ二十歳からしか認められないというような意味合いもございます。

私が勤務する看護学校で、高校新卒で来た18歳の学生たちを見たときに、まだ子供らしさがあつて、キャピキャピとして入学した生活を送るのですけれども、やはりそれが2年たって成人式を迎える頃には、看護師になって人の命を守るんだという強い職業感の確立と、あとは自己責任感が芽生えている、これを間近に見ております。

ですから、この2年を経過して、改めて成人であるという自覚を持たせる意味でも、これまでどおり二十歳での開催が望ましいかと思えます。

また、中島先生と意見が重なりますけれども、2023年ですかね、初めて民法改正後の18歳の成人が認められるわけですけれども、実は2023年に18歳で成人式をするとすると、今度は下の子の成人式が重なります。3学年の成人式を一度に開催するという事は、やはり現実的ではないのかなと、こういう思いもありまして、私は今までどおり、二十歳での成人式開催を求めたいなと思っております。

以上です。

【朝長市長】

ありがとうございました。そうしたら、内海委員、お願いします。

【内海教育委員】

私も20歳で成人式の式典に出てほしいなと思っています。あと、2点あるんですけれども、やっぱり成人式って、ずっと考えてみたら日本の文化というような気がするんですね、一つの節目でしょうし。それと家族愛、この2点が私の頭の中でぱっとよぎっていきました。

片一方で、考えたんですけれども、自動車学校をやっていますので、18歳で免許を取りに来ます。高校3年生の彼らと接するのですけれども、合田委員がおっしゃったように、まだまだ。自動車学校の授業料って誰が出すといったら、ほとんどが親が出してあげているんですね。それを見て、じゃあ、今度18歳、自動車学校を卒業した。大学に入って1年、2年たったときに自動車学校に遊びに来てくれるんですけど、がらっと変わっているんですね。だから、私は18歳で高校を卒業することで、社会人の第一歩を踏み出すのが高校を出てからであれば、やっぱり社会人としての一つの節目というのは、私も二十歳かなと。法律がどうであれ、日本の文化として、この二十歳を祝うというのはとても大事なことじゃないかなと思いました。

それと、私も教育委員になって式典に参加させていただき、感じるんですけれども、自主的ですよ。二十歳の子たちが1年間かけて準備をして、自分たちの言葉で、自分たちの体であの式典を運営していくという姿を見たときに。特に二十歳の子の挨拶をする言葉、一人一人思いを込めて話しているのがとても胸に響いて。アンケートにはいろいろ書いてありますけれども、あの自主性を、運営するときに、例えば18歳の子がそれだけ時間を取って打合せができるかとなると、私はできないんじゃないかなと。そういう意味で、二十歳での式典に賛成をしたいと思っています。

以上です。

【朝長市長】

ありがとうございました。では、萩原委員、お願いします。

【萩原教育委員】

私も皆さんと同じように、二十歳でお祝いの会をすることに賛成でございます。今年の成人式のアンケートにもありましたけど、18歳で成人になった年にあるからこそ式典の意味があるんじゃないかというような新しい方の考えがありまして、それもほんとうだなとは思ったんですが、18歳でできることと、できないこと、民法の中で決まったように、ちょっと中途半端な成人のような気がしますので、やはり二十歳のほうがいいのではないかなと思います。

成人の日は1月に国が制定されていますので、高校生の1月といえば、もうほんとうに皆さんおっしゃったように、大学受験と就職と重なって大変なときだと思いますので、精神的になかなか式典には出る余裕もない。また、準備委員の方々にもかなりの負担を強いるというようなことになるんじゃないかと思いません。教育の中で一番大きなお金の要る時期でもありますので、昨今の流行のように、振り袖を着たいとか何とかいろいろなことを子供が言うようであれば、これまた家庭の大変な負担になるので、なかなか難しいのではないかと考えております。

私も今年初めて成人式に出させていただきました。この年で初めて成人式に出たのですが、印象として、ほんとうに穏やかといいでしょうか、わりに古風なんだなど。もっと派手なものかと思っておりましたが、全国的に大会の意図を踏んだような形で、ああ、穏やかなんだという印象を持ちました。式典の新しい名称とか、それから内容については、準備委員の方々といろんな意見を交わしながら、準備委員が中心になって決めればよいことじゃないかと思っています。

それと、新成人へのアンケートで、式に対する意見の多さにちょっと感動したんですね。普通、大人はあまりいろいろ書かないんですが、子供たちがいっぱいいろんなことを書いているので、それを見ておりましたら、斬新なところで、二十歳になるまでの佐世保とか世界の出来事をビデオで上映してほしいとか、ミニコンサートをしてほしいとか、何か新しい意見がいっぱいありましたので、そういう意見をたくさん持ち寄って、いい会にすればいいんじゃないかなと思っています。

それから、18歳で成人になったときに何か周知が必要じゃないかという問題もあると思うのですが、多分皆さん高校生で、高校のほうでも何かあるのかなと思いますが、働いている方もいらっしゃるのでも、市としてもお祝いと、それから、できること、できないことですかね。何かそういったリーフレットといいでしょうか、そういうことだけでも、ちょっと予算がどうか私には分かりませんが、何か佐世保市としてのお祝いみたいなことを何年間かはする必要はあるんじゃないかなと感じております。

以上でございます。

【朝長市長】

ありがとうございました。

それでは、それぞれ委員さんからご意見を頂きました。教育長のご意見を頂きたいと思います。教育長、お願いします。

【西本教育長】

それぞれの委員さんからご意見を頂きまして、私も同感でございます。特に付け加えることもないんですけども、あえて言わせていただければ、自分のことで恐縮なのですが、その時期、大学に進学あるいは就職をして、一旦家から出るという覚悟の時期でございまして、自分のときに、いわゆる5月病というのにかかりました。やっぱり初めて家から出て、家族の絆とか、親のありがたさとか、ふるさとのよさとか、そういったものをやっとな心のゆとりができたときに見詰め直すことができました。

そういう意味では、その時期にある程度自分のことをしっかりと見詰める余裕がないといけない時期ではないかと思えます。そういうためにも、2年間ぐらいは外に出て、そういったことを経験した後にふるさとに戻ってきて成人式に参加をする。できれば佐世保に残っていただきたいんですけども、それでも一旦は家から切り離されるという環境に置かれることが自分を見詰めるいい時間かなと思っておりますので、そういう意味では、ぜひ私も、その時間を経過した後、改めて自分あるいはふるさと、友達、そういったものに出会うという期間が欲しいなと思っておりますので、できれば二十歳でお願いしたいなと思えます。

また、これは事務的なことなんですけど、もし18歳で成人式をするとなると、17歳、18歳、その高校3年生が準備委員会として中心になって、今、二十歳になる方々にお願いしておりますが、そういった準備が非常に大変でございますので、また違うことを考えないといけないかなということもございまして。そういったことから考えますと、私も皆さんのお考え同様、それぞれの意見に全く賛成でございますので、できればそんな方向で今後の成人式典検討委員会の意見も聞きながら、一定、教育委員会として考え方を取りまとめたみたいと思えます。

以上でございます。

【朝長市長】

ありがとうございました。それぞれご意見を頂きましたが、まずは共通して、今までどおり二十歳での成人式がいいだろうというようなことでの意見だと思えます。私も、年齢に関しましては、まさしく皆様がおっしゃるとおり、20歳のほうが一番いいのかなという感じがいたします。特に今ご意見ございました

ように、18歳から高校を卒業する前の段階になりますので、高校在学中に成人式というの何となく、先ほどそれぞれおっしゃったように、受験も間近だし、まだ生徒の身でという、そんな感じもあろうかと思えますし、まだ社会に出ているというような、そんな雰囲気はない時期だと思いますので、18歳でというのはちょっと時期が早いのかなと思います。そしてまた、この2年間に社会に就職をされた方もやはり成長するでしょうし、また、学生は学生として、大学に行った人は行った人でまた成長する機会があるんじゃないかと思えます。そういう意味で、二十歳の成人式典が望ましいんじゃないかなと、私自身も考えたいと思っております。

それから、先ほど、中島先生が今回のコロナの件で来年の成人式はどうなるんだろうというようなことをお話しされました。その中で分散開催という言葉をちらっとおっしゃったんですね。

私は今、佐世保市全体の成人式は当然出るわけでありましたが、現在、旧、合併をした町ですね。世知原、吉井、そして、あと鹿町、江迎、宇久ですね。小佐々はされていないような感じがするんです。お招きいただいてませんので。この五つの町からは毎年お招きいただきます。それで、ここは1月の2日か3日に、皆さんそれぞれ帰ってきやすいようにということでされていますね。

そういう中で、ほんとうに合併地域なもんですから、子供さんたちが少ないので、大体四、五十人とか60人とか、そんなのが多いんですけど。それぞれ一人一人に話をさせるんですよ。皆さん一人一人に今どうしているのかというようなことをね。そうすると、自分自身の存在感が認められるというのかな。そして、周りにそれぞれの保護者、親御さんたちも家族の方もおられる。それから、それぞれの地域の関係者の皆さんたちがたくさんおられる中で、自分の考え方を自己紹介を含めてですから短時間なんですけど、1分か2分間話をされます。それを聞いているとね、ものすごく感動するんですよ。それぞれやはり自分の思いというものを述べて、今後どうしたいというようなことをはっきりと親に言います。

そういう分散というかな、今、地区自治協議会がございますので、そういう地区自治協議会単位でやるというのも一つの方法かなというような感じもします。支所単位というのはいいんですけど、ただ、中央、本庁管内でそれが果たしてそれぞれできるかどうかというのがちょっと気にかかるんですけど。もし、それが分散でできるとすれば、非常にみんな参加して、自分が中心になれるような成人式になっていくんじゃないかなというような感じもします。

そしてまた、今は来賓としては市議さんとか、あるいは県議さんとか、そういう方たちがいらっしゃいます。ご家族とか、そういう関係者は人数の関係でアルカスは入れないんですよ。それで、自分たち成人者だけでこれを行っているよ

うな感じですけど、地域を含めたというようなことが分散方式であればできる可能性があるのかなという感じがいたします。

ただ、分散でやると、やるほうは大変だと思います。それぞれ準備をするのが大変だと思いますので。ただ、それぞれの地域で自治協議会が今できていますので、自治協議会の中でお願いをしながらやっていく方法もあるのかなということを感じますので、それも一つの研究材料にね。私、そうしなさいという話をしていませんけどね。そうすればじゃなくて、そういうことも見られて検討されるといいのかなという感じはいたします。多分、見直しをすれば、こういうときしかできないんじゃないかなと思いますのでね、1回、そういう検討をされた上で、全体がよければ、全体で進めていいし、分散がよければ分散でやるというような方法も考えられたらいいんじゃないかなという感じを持っております。

私の考え方というのはそういう考え方でございますけど、皆さん方、もう少し補足があれば、それぞれ先生方おっしゃっていただければと思います。よろしければどうぞ、それぞれで。よろしいですか。

【西本教育長】

今、市長からも意見を頂きました。私も呼ばれて、旧、合併の町に行って、ほんとうに一人一言を聞くのですが。そのときに、やっぱり見守り隊とか、地域の方々が出てきて、あのときの小学生のこがんふとなってというふうな、そういった逆に成人された方だけじゃなくて、見守っていただいた方々にそういう大きくなった姿を見せるというのも、また一つの感慨深いものがありますので、一つのご提案ということで、どういった方法があるのか、それもちよつと事務方の意見も聞きながら、委員の皆さんにもお諮りしながら、やり方を検討していきたいなと思います。

以上でございます。

【朝長市長】

ありがとうございます。それでは、次の2番目の新型コロナウイルス感染症拡大の中の教育についてということに入りたいと思います。

今日は、一人1台、端末が導入された後の学習の様子をご紹介いただけるということでございます。内容の説明を教育委員会事務局からお願いをしたいと思います。

【陣内学校教育部長兼学校教育課長】

学校教育部長です。

おはようございます。本日の内容は、新型コロナウイルス感染症拡大ということが一つのテーマになっておりますが、この中で、学びの保障をしていくためには、一人1台端末の整備が大変大きな鍵を握っておると考えております。そのようなことから、今般進めておりますGIGAスクール構想の整備につきまして

ご説明を申し上げたいと思っております。

資料は、まずスクリーン、もしくはお手元の当日2の資料をご参照いただければと思います。

この表はGIGAスクール構想によりまして、佐世保の学校にこのような学びの世界を構築したいという私どもの願いと、それから、このような学びの世界を構築するという私どもの覚悟を示したものでございます。

真ん中から上のほうに、右側に向かって矢印が進むところがございますが、それの一番左側のAというところをご覧ください。Aに示しておりますように、全ての児童生徒が学校や家庭で存分に活用できる端末の整備をするために、一人1台端末、高速大容量通信、クラウド、この三つをキーワードとして整備を行い、子供たちの学びを様々な面で変えてまいりたいと思っております。

続きまして、Aの右側のBのほうに目をお移してください。この整備によって、まずは全ての児童生徒が学びにおける時間や距離などの制約から解放される世界を考えたいと思っております。具体的には、遠隔授業やオンライン授業と呼ばれるものがまず当たります。極小規模の学校の子供たちが多人数の子供たちと意見を交換したり、また、自分の学級にしながら、ほかの場所やほかの国にいる方からネイティブスピーキングを聞いたりとか、また専門家にインタビューをして学びを追求していく、そのようなことができるようになるかと思っております。

本日は、実際に清水小学校の4年1組の子供たちにこの場で遠隔授業を実施いたします。子供たちは、これまで社会科の学習で、私たちのまちの健康で住みよい暮らしを支えている仕組みや人々の働きを調べる活動として、佐世保市のごみの処理について調査研究を重ねてきました。現在、この追求の終末の過程に差しかかっております。そこで、子供たちが市の取組の総まとめとして、朝長市長へインタビューを計画いたしております。

【児童】

こんにちは。私たちは清水小学校4年1組です。

【児童】

私たちは佐世保市のごみ処理のことについて学習しました。

【児童】

佐世保市のごみ処理の仕方やごみを減らす工夫が分かりました。

【児童】

私たちも佐世保市のごみ処理や環境のことについて考えていきたいと思っております。

【児童】

そんな私たちに何かアドバイスはありませんか。

【朝長市長】

アドバイスをということです。清水小学校の皆さん、4年1組ですか。

【児童】

はい。

【朝長市長】

4年1組ね。今日はこうしてリモート授業ができるということ、大変うれしく思います。

それでは、今、皆さん方がごみ処理について勉強されているということですので、佐世保市の取組について少し話をしていきたいと思いますが、いいですか。

【児童】

はい。

【朝長市長】

佐世保市のごみ処理は、皆さんの生活が衛生的になるように、分かりやすく言えば、皆さんが病気にならないということが一番に考えて進めています。それは、市民の皆さんの安全で健康な暮らしを実現することは、市長として仕事の中でも最も大切なものの一つと考えているからです。

聞こえますか。マスクを取ってもいいですか。聞こえますか？

【児童】

はい。

【朝長市長】

大丈夫？

また、その取組の中で、どうすればごみを減らすことができるか、どうすればごみを再利用することができるのかなどの部分を一生懸命に進めているところです。

皆さんも環境汚染の話聞いたことがあるかもしれません。私たち佐世保市民だけでなく、全世界の人々は、これからの地球の環境全体を守りながら生活することがますます重要になってきます。昨日はほんとうに大変な大雨だったですね。皆さん、非常に心配をされたと思います。この大雨が降るというのも、地球が温暖化になっているということが一つの原因だと言われるんですね。そういうことから、できる限りごみを出さないで、そして、ごみを焼却しない、そういう方法を考えていくことが必要じゃないかなということが言われています。

その第一歩は、できるだけごみを出さないということと、それから、決められたごみの出し方をするという、また、ポイ捨てをしないということですね。そういうことを皆さんの毎日の生活を工夫してやっていくことが必要ではないかなと、そのように思います。

私たちの宝物である九十九島をはじめとする佐世保の美しい自然を守って

くためにも、そしてまた環境を守っていくためにも、ぜひ皆さんも自分でできること、今回それぞれ環境、ごみのことについても勉強されたと思いますが、それをしっかりと実践に移していく、実行していくということが大事じゃないかなと思います。頭では分かっているけど、しかし、それを実行しないとね、これは何もならないので、みんなで実行していきましょうね。分かりましたか。

【児童】

はい。

【朝長市長】

はい、ありがとう。

皆さんから何か聞くことはありますか。ありません？

【児童】

はい。

【朝長市長】

はい。

【児童】

今日は私たちのために貴重なお話をありがとうございました。

【児童】

ありがとうございました。

【朝長市長】

はい、こちらこそありがとうございました。コロナに負けないように、元気な体をつくって、そして頑張って勉強してください。どうも今日はありがとうございました。

【児童】

ありがとうございました。

【陣内学校教育部長兼学校教育課長】

どうもありがとうございました。今見ていただきましたように、直接フェース・ツー・フェースで温かい言葉をかけていただくというのが、子供たちの学びの単なる知識理解ではなくて、質の部分でほんとうに大きな意味を持つのではないかなと思っております。

また、このように場所の制約がなくなりますので、例えば臨時休校のときの指導、それから、学校に登校することがなかなか難しい子供さんが家庭にいらっしゃる場合の指導等につきましても、授業はもとより、朝の会等でコミュニケーションを取るなど、様々な大きな成果をもたらしてくれるのではないかなと考えているところでございます。

それでは、資料のほうはBからCのほうに目をお移してください。さらには、全ての児童生徒が個別最適化された学びを実現していきたいと思っております。

プロジェクターの画面のほうをご覧くださいよろしいでしょうか。ここではデジタル教科書の映像をまずご覧いただきたいと思います。

紙媒体の教科書では、固定化された図形を基にして、円の面積を長方形に変換する概念作業を実施しながら円の面積を考えていきますが、このようなデジタル教科書によりまして、動画によって、より確実に理解することが可能となってまいります。言葉による指導を受けてイメージを膨らませることが難しい子供たちに対しても、指導のためのツールが黒板やチョーク、教科書から進化し、より分かりやすい指導が今後可能となってまいります。

もう一度動画を出してもらっていいですか。分かりました。結構です。

それでは、もう一つ、デモを見ていただきたいと思うのですが、続いて、デジタル教材のほうをご紹介します。

これは市内の小中学校で今、導入を進めておりますICT機能を生かしたドリル教材でございます。学年、教科、単元をアトラダムに入力してみてください。

小学校1年生から中学校3年生までの全ての教科の教材が準備されております。単元と教科、学年、単元と出しますと、その中で3段階の難易度、標準コース、じっくりやるコース、それから発展的にするコースの3場面の難易度に分かれた問題が示されます。

標準的な問題を選択してみてください。すると、このような質問が出てまいります。もう間違っただすね。解いてみて間違っただ場合は、正しい正答の考え方が補習的に示されたり、またはその間違いに至る原因となる、その前の既習事項の学び直しをする案内が出てまいります。一つ開けてみてください。こういった観点が十分に学ぶことができていなかったために、現在している問題ができていなかったという部分でございます。こういった学び直しができるという分です。

また、このように子供たちが自分たちで学習を進めると同時に、教師側にはどの子供がどのくらいの時間、どういった問題を解いたのか。また、その中でどの程度の理解度であったのかを一元的に一括で管理することができます。そのように子供たちに対する学びの支援が大変充実するものでございます。

このドリルにつきましては、各家庭に持ち帰った端末においても実施ができるように、今、準備をしております。ですから、学校だけでなく、このような学びが全ての場において実施ができるようになるということでございます。

続きまして、また当日2の資料のDのほうに目をお移してください。

学びの最終形としましては、全ての児童生徒が新しい時代を生き抜く創造性や社会性を育成するというステージに進みたいと思っております。世界経済協力開発機構、いわゆるPISAは、3年ごとに15歳、義務教育修了段階の世界

の子供たちを対象としまして学習到達度を調査しております。最新版が2018年度の調査でございましたが、このときの日本のアチーブといたしましては、数学的リテラシーは、OECD参加37か国中のトップ、それから科学的リテラシーは、37か国中の第2位でございました。しかしながら、読解力は、37か国中の11位という結果でございました。

画面を変えてもらっていいですか。

今出しております画面は、このPISA型の学力調査で読解力を測定するテストの問題例文でございます。今回の調査結果によりますと、日本の子供たちは、必要な情報がインターネット上のどのウェブサイトに記載されているかを推測して探し出す能力が低い——検索能力が低いということです。それから、ウェブサイトで探し出した情報の質、また信憑性を評価し、自分がどう対処するか根拠を示して説明する能力が特に落ち込んでいるということが分かっております。

また、この背景としまして、幾つかの調査が実際に伴っておりますが、ネット上でチャットをする割合、それから一人用ゲームで遊ぶ割合については、日本の子供たちはOECDの平均を2割ほど上回っておりながら、コンピューターを使って学習をする割合、学校の勉強のためにインターネットのサイトを検索する割合、また、関連資料を見つけるためにインターネットを活用する割合については、逆にOECD平均を2割ほど下回っている。グラフも示しておりますが、左側の二つ、手前が日本、奥のほうのオレンジがOECDの平均でございます。左側の二つ、ネット上でチャットをする部分と一人用ゲームで遊ぶ部分は突出しておりますが、学びに使うという部分は大変著しく低い状況である。これが日本の子供たちの現状ということでございます。

思い切って端的に言いますと、LINEなどのチャットやオンラインゲームは大変多く使用しておりますが、学びにはほとんど活用ができていないという状況。これが、PISAが求めております21世紀型の読解力の育成を妨げているという背景でございます。

そこで、ICT環境を生かしたプロジェクト型学習による主体的で対話的な深い学びに対する実践をすぐにでも始めなければならないと考えておりますが、この実践のために、今回のような一人1台端末の整備はマストアイテムということになるかと思っております。今の小中学生が社会の中心として活躍する時代は、ICT環境の真ただ中となります。今ではなく、これからを生きる子供たちのために必要な資質や能力を育成するためにも、ICT環境の実現が喫緊の課題になっているところではないかなと考えております。

私のほうからは以上でございます。

【朝長市長】

ありがとうございました。教育委員の皆さん方にも、それぞれのお立場からの

思いや新型コロナウイルス感染症拡大の中で教育がどうあるべきかなどの考えというものをもちではないかと思っておりますので、委員の皆様、ご意見をお聞かせいただきたいと思っております。今、部長のほうからもお話がございましたが、そういう新しいやり方というものを今、模索されているようでございますので、ぜひそれぞれの先生方のご意見をお聞きしたいと思っております。

まず、中島委員、お願いいたします。

【中島教育長職務代理者】

失礼します。

この感染症拡大の中にあつての教育という、この総合会議でのお題ですけども、非常に今まさに切実で重層なテーマでありまして、もちろん学校教育が中核になるという認識で言っているんですけども、口火ということで総花的な話になるかと思っておりますけれども、所感等を述べさせていただきたいと思っております。

まずをもちまして、この年明け早々のコロナの襲来というのは、ほんとうに全国津々浦々に大きな影を残して、本市におきましても連日テレビ等で報道されましたが、それ以来、朝長市長をはじめ当局の皆様型には、ほんとうに昼夜を問わず緊急対応に追われる日々が今も続いておられると思っております。

教育委員会においても、西本教育長の陣頭指揮によりまして、学校をはじめ公共施設等に早い段階で方針が示され、それに基づきまして、その場その場で実態に即した適切な対応をしていただきまして、大きな混乱等もなく、ある意味ほっとしているところであります。

緊急事態ですので、例年の学校訪問や施設見学というのはなかなかできませんでしたが、定例の教育委員会や緊急メール等で適時状況を報告いただきまして、方向性を一つにできたということはほんとうによかったと思っております。

また、幅を広げまして、社会教育につきましても、たまたま先週、社会教育の自主研究会というのがありまして、社会教育課のほうにお世話いただいている毎月の定例の会なんですけれども、この中においても、社会教育委員さんをはじめ、児童クラブであったりとか、市立幼稚園、市民病院、PTA、自治会等に係る方々からも、それぞれのお立場でほんとうに丁寧な防止対策を講じていただきながら、子供たちやお年寄り、そして、そのコミュニティーを守る活動にほんとうに地道に取り組まれておりまして、頭がほんとうに下がる思いでした。それぞれ様々な悩みがあるんですけども、その中でも成功例が、失敗談というのをその中で共有できたというのが非常に有意義だったと思っております。

よく言われるコロナという病気というのは、まさに病気そのものが恐怖なんですけれども、そのコロナがもたらす、余儀なくする、物理的かつ精神的な分離であるとか分断、これがいわゆる孤立感や不安感というのを募らせて、人々の心を非常に苦しめているわけなんですけれども、今では情緒の安定には場と関わりと

というのが非常に大事です。最近話題になっているWHOにおきましても、その中で健康の定義というのが、肉体的、精神的、そして社会的に満たされているということだそうです。新しい生活様式の中にあっても、これまで以上に事務局から紹介があったようにリモート等を駆使しながら、意図的につながることで、共感することをやっていく、仕掛けていくということが非常に必要かなと思っています。

また、今まさに渦中にあるわけですがけれども、コロナ後というのがなかなか見えてこないというのも大きなストレスです。被害や損失は増幅して、業績は悪化の一方です。一番底に加えて二番底も見えない不安感があります。

ただ、こういうときこそ、現実的にはなかなか難しいと思うんですけれども、それぞれの持ち場で知恵を出し合って、明確なエビデンスというのはなかなか難しいと思うんですけれども、何とか仮説を立てて、短期と長期の決算の予想を打ち出すということが非常に大事かなと思っています。ある意味、楽観的かもしれませんが、厳しい状況の中でも具体的な目標を示されれば、心理は上に振れます。もうしばらくの間は様々な制限があつてとどまることが多いと思いますけれども、少しずつ明るい兆しというのも見えてきています。今はそれぞれの場面で最新の情報を共有し、適宜、感染症の防止対策を講じていきながら、可能な限り、日常の活動を回していく、積み上げていくことが大切かなと思っています。

これも言うまでもないことかもしれませんが、子供たちの成長には子供たちが必要です。子供たちは、まみれて強くなると思います。学校においても、各教科等の指導はもちろんですが、多くの先生方が今言われているように仲間づくりとか体験活動、そういったもののやり方を工夫しながら、柔軟に取り組んでほしいと思っています。

ざっくりした話でしたけど、口火を切つてということで、以上です。

【朝長市長】

ありがとうございました。それでは、合田委員、お願いします。

【合田教育委員】

保護者の立場からの意見も少し述べさせていただければと思います。

私の子供はもう高校生でしたので、ある程度親のサポートというのは必要ではありませんでしたが、周りにいる小学生や中学生の保護者の皆様からのお声を聞きますと、得体の知れないコロナウイルスの感染が拡大し始めたときに、やはり学校に行かせるのがとても不安だったというお声を、まず休業前にたくさん聞いておりました。ですから、佐世保市も2度の休業をいたしましたけれども、これはほんとうによい判断であったと思っています。

ただ、家庭で子供を見るということがどんなに大変だったかというお話をこ

の休業の後にお聞きしました。特に、下に乳幼児のお子様がおられる小学生低学年の保護者様たちからは、ただでさえ下の子に手がかかるのに、お友達と遊べず、学校で勉強することもできず、ストレスがたまった小学生のお兄ちゃん、お姉ちゃんの相手をしなければならない。しかも学習の遅れが気になるので、教えなければいけない。これが大変なストレスだったというお声を伺いました。

ただ、佐世保市では、それぞれの学校が対応してくださって、そういうご家庭のお子様は、どうぞ学校に登校させてください。3密を避けてしっかりと監護しますという対策を教育委員会が取ってくださいましたので、それに救われた。それがなかったら、もしかしたら虐待をしていたかもしれないというようなお声も聞かれました。

一方の学習面ですね。これはほんとうに大変だったようで、特に受験生を抱えたお母様、お父様ですけれども、不安は、ほんとうに負担が大きかったようでございます。学校から配付されたプリントや課題を親が見てあげたくても、どうしても教えられない。また、保護者もエッセンシャル・ワーカーと言われる人たちは子供を置いて仕事に行かなければなりませんので、子供の学習までもは見切れない。こういったお声が聞かれました。

そんな中、先ほどのデモンストレーションと申しますか、清水小の子供たちとのリモートでのお話ですね。この場面を実際に見ると、これが今あったなら、どれだけの子供さんや親御さんが救われたのかなという思いがいたします。くしくも時期がちょうど春で、転勤の時期と重なりました。ただでさえ不安を抱えた子供たちが学校に行けず、精神面でのストレスも大きかったと思いますが、学習に対する不安ですね。これは、このリモートの授業ができるようになれば、特に習熟度に応じたドリルがあるというご説明を頂きましたので、これはほんとうに発展的なことができるのではないかなと思った次第です。

陣内先生がおっしゃいました、日本の子供たちは検索能力が低い。また、ネットの情報の信憑性を判断して、それが正しいことであることを証明する力が低いということが私たち大人にも当てはまるのかなと。学校で文献を検索させるのですけれども、ネットの情報が正しいかどうかをやはり分からないまま、それを引っ張ってきて医療や看護をするというところに恐ろしさを感じます。それが小学生のうちからネット環境に慣れて、ネット情報の信憑性を判断する力がつけば、最新のことを取り込みながら、いろんなことが実践できる大人になるのかなと、先ほど清水小の子供たちの姿を見ながら思った次第です。

学校現場の衛生面とか、課題はたくさんありますけれども、またそれは順番が回ってきたときに述べさせていただければと思います。

以上です。

【朝長市長】

ありがとうございました。それでは、内海先生。

【内海教育委員】

私は、リモート授業の効果と課題というのをお話ししたいと思います。

アナログとデジタルの調和、キーワードは選択という話でございます。実は先ほど、陣内部長からいろいろお話がありました。こういう効果があるとかいう話の中で、私は社会人、経営者として、オンライン、それからウェブ会議、逆にそれを使わないと、全国の仲間と連絡が取れないという体験をまずしました。

その次に、実は大学生が今どうしているのか。自動車学校にちょうど大学生が来られているんですよ。この時期に来れるのと言うけど、学校がやっていないので、結局免許を取ろうということでも来てもらって、ロビーで彼ら、彼女たちは一生懸命パソコンを操作している。オンライン授業なんですね。オンライン授業がどう行われているのか。

それから、大学の先生とこの間、会ってお話を聞きました。まず、大学の先生がライブじゃないんですね。まず録画されます。録画したのをYouTubeに上げて、それを限定して学生がコード番号でそこに入り込んで先生の授業を受ける。先生の授業は1週間流れます。

じゃあ、先生、単位ってどうするんですかと聞いたら、その授業の中で最後に試験をする。試験問題を出す。その試験問題は、きちっとそれを聞いていないと試験問題は解けない。その試験問題を実はメールで返信をする。いやあ、しかし、一人一人大変でしょう、採点するの。いや、それはAIがやるんです。AIがやるんですか。もう自動的にその答えを作っている。だから、それをぽんと投げたときに、70点とか80点とか、合格だったら単位をあげるよと。へえ、そうなんだと思って、片一方、録画はそうなんだけど、じゃあ、ライブはどうなんだろう。ライブな授業は。これがすごいなと思ったんですけど、ライブで1——先生と50人としまして、キャッチボールがすごいんですね。チャットというのを使って、先生、この質問、今のところに対して。じゃあ、みんな、今、私が話したことに対して何割ぐらい理解できているか、ちょっとアンケートを取るねと、リアルタイムにアンケートを取る。8割の人。じゃあ、2割の人は分かっていないんだと。2割の人のためにもう一回授業をするよとか、そういうのを私、自動車学校で見て、あ、そうか、大学がそう。であれば、高校はどうあるべきか。最後、小中学校はどういうリモート授業をしていったらいいのかということで、ちょっと考えてみました。

効果と課題を三つ挙げさせてもらいます。

効果は、何ととっても先ほど部長がおっしゃったように場所を取らない。どこでもいい。これが最大の特徴かなと思います。とにかくパソコンさえあればどこでも参加できるし、どこでも勉強ができるというのが一番の効果。

じゃあ、課題って何って。実は道具をどうするかということ。一人1台という予算がついて配られると思うのですがけれども、私は最初シンガポールに行ったときに、シンガポールはタブレットでした。タブレットを持って、教科書がないんです。タブレットで学校に行って、タブレットを家に持って帰って勉強しているというのを見させてもらいました。

しかし、大学生の授業を見て、タブレットは見ますよね。見て、即キーボードが打てない。もちろんこういうのを付けたら、実はタブレットにもこうやってキーボードが打てるんですけど、非常に打ちにくい。私、やってみました。であれば、やっぱりノートパソコンが効果的なんだなということ。小中学校というよりも、高校、大学のためにも、このノートパソコンを操作するというのを身につけていたほうがいいんじゃないかなということを考えました。ハードの面の選択。

それから、ソフトの部分は、やっぱり家庭の中でどれだけ親と一緒にしてそれに取り組むかということが大事かなと。なぜって、集中力ってどのくらいあるかということ、私、この間、1時間のオンラインの授業を受けたんですけども、集中力は切れちゃった。途中、コーヒーを飲みに行ったりですね。こう言いながら、あれあれあれっと思って、向こうが見ていないと思って、内海さん、今、映ってなかったよねと言われたんですけども。集中力をもたせるために、やっぱり環境を整えてやらないといけないんじゃないかなという思いがしています。

効果の面で、もう一つ考えたんですけど、じゃあ、リアルな授業をしました。たまたまその授業に参加できなかった子供たちのために録画しました。録画で、当然、後で補習みたいにして全く同じ授業が受けられる。これはすばらしい。しかし、もう一つ考えました。その授業を、じゃあ、授業を録画したのを予習として見たらどうなんだろう。事前にそれを見て勉強して、頭に入れて、それからライブでもう一回授業を受けるというのは、効果は倍ぐらいになるんじゃないかなと。

じゃあ、実はそのときの課題は何かとなると、その課題は先生方です。先生方がどれほど子供たちに向かって情報発信するか。考えたら、1対30じゃなくて、2対30でもいいんじゃないの？ 2人か3人の先生がこちらに入って、同時に話す、それから書く、それからアンケートを取るとか。チャットに対して、質問に対して答えるというのもできるなということを考えて、ずっと最後に行き着いた効果というのは、知的レベル、学力向上にすごく役立つということが私は手応えとして感じました。

じゃあ、課題は何って。課題はやっぱり物の部分で、これはアナログじゃないと駄目じゃないかなと。なぜならば、音楽をCDで聴いていいなと思うのと、コンサートに行くと、コンサートでわくわくしながら聴くのと、この違いはやっぱり心に響く、脳に響くというのはアナログなので、リモート授業が全てじゃない。

大事だけれども、しかしアナログの授業がとても大事で、先生方とのフェース・ツー・フェース、仲間とのフェース・ツー・フェース、コミュニケーションというのを抜きにしては考えられないのではないかなと思いました。

最後は、私、思いました。先ほど聞いたのですけれども、佐世保市の先生方は1,500人いらっしゃる。だったら、この1,500人の中で、ほんとうに情熱を持って、俺、やりたいという20代、30代、40代、50代の人を集めて情熱チームみたいなをつくって、この佐世保で圧倒的に、全国圧倒的にこのリモート授業を展開するというプロジェクトができれば面白いだろうなと思って、一人わくわくしながら今日は参加しております。

以上でございます。

【朝長市長】

ありがとうございました。それでは、一通り皆さん、先生にお聞きしたいと思いますので、萩原先生、お願いします。

【萩原教育委員】

私は地域の者として、子供たちの居場所ということで少し考えてみました。とにかく子供がいるのは家庭でした。ほとんどが家庭で、家庭と、学校が開かれれば学校、それから児童クラブの存在というようなことが大きかったと思うんです。

家庭については、さっき合田先生も言われましたように、いろんな問題があったとは思いますが、その忙しい中でも子供と一緒に料理をしたりとか、いろんなものを作ったりとか、日頃できないお散歩をしたりとか、いろんなことをお母さんやお父さんが考えてくださって、日頃思ってもなかなかできなかったことがかえってできましたよというような声をたくさん聞きました。それは夏休みと同じような状況ではありますが、なかなか仕事を休めないお母さんたちが一緒に子供たちと過ごすことのできた、なかなかいい面ではなかったかなとも思っています。

その反面、何かいろんなストレスがあったり、それこそ学習の遅れとか、いろんなことがありましたので、問題はそんなに簡単なものではないと思いますが、家庭の教育力といいましょうか、お父さん、お母さんが子供に対してどういうことをさせたいとか、どういう子供に育てほしいとか、そういうことを試されるような期間ではなかったかなと思っております。これがほんとう、長きにわたれば、またこれは大変だったとは思いますが、幸いにしてまああの期間だったので、いろんなことが家庭で分かったのではないかな。今後またテレワークをするような会社が増えたりとかすれば、今回の事例を参考にして、お母さんたちが子供たちとの時間の使い方を考えると、それから、リモートの授業ができるようになれば、お父さん、お母さんも教育に関わってくる機会もまた増えるのではな

いかなということを考えてました。

それと、児童クラブが子供を引き受けてくれたというので、私の家の近くにも三つぐらい児童クラブがありましたので、二つの児童クラブにちょっとお話を伺ってみました。30名ぐらいだったかな。30名ぐらいを受け入れているクラブは、休校措置のときには10名以下で、23名ぐらいのクラブでは13名ぐらいが参加で、あとは家庭で生活ができたのでよかった、助かりましたというようなことでした。そこでは学校からの宿題を主にやって、体を動かすことも考えて、学校の体育館が借りられたりして、ほんとうに助かったというようなお話も聞きましたし、遊びの要素を加えて、折り紙をしたりとか、そういういろんな子供のことを考えて、教育の場として利用できたというようなことでした。

だけれども、とにかくクラスターが発生したらとか、そういうことが一番怖かったので、徹底した消毒とか、検温とか、マスクとか、部屋の空気の換気とか、机の座り方、物品の消毒、そういうあらゆることに注意を払って、きちんと運営してくださっていたので、これはなかなか大変なことだな。でも、よくやってくださったなということを感じております。

スタッフの働き方がなかなか大変ですよというようなことで、普通は3時間ぐらい働けばいいんだけど、学校がないときには8時間働かなきゃいけない。そういうふうなことをどうしていくかというのが今後の課題ですとおっしゃっていましたが、一つよかったのは、今回のことで医療従事者など働かざるを得ない人たちの把握がきちんとできましたというようなことをおっしゃいました。それは学校においても同じようなことだろうと思うんですが、どの子がどのうるときにしなきゃいけないということを第2波に備えてきちんと情報は整理しておくべきなんじゃないかなと思いました。児童クラブは偉いなと感じて帰ってきた次第です。

子供たちの居場所をつくるときには、どうしてもマンパワーと申しましょうか、人が必要だと思うんですね。その人が児童クラブでも足りない。学校の先生方が派遣されたというようなお話も聞きましたけれども、やはり常日頃から、何かあったときに学校のお手伝いができるというか、児童クラブにかかわらず、開放された学校でも3密を避けるように、図書室が、体育館が何とかで、たくさん使えば人がたくさん要ると思うんですね。だけど、地域の人の中にもお手伝いをしたいと思っている方もたくさんいると思いますので、放課後児童クラブのスタッフであったりとか、主任児童員であったり、学校のいろいろ運営委員会とか評議委員会とか、会議があります。それに参加されているような学校のことをよくご存じの方に何かボランティアみたいなことができないかなと、そういうふうなことも感じました。

だから、今回はコロナで年寄りがなかなか使えないということもあったので、

なかなかそれは難しいかなとは思ったんですが、若い方もいらっしゃると思いますので、常日頃からやっぱり学校は何か地域と人材、人の行き来といいたいしょうかね、そういうところも考えていかなきゃいけないんじゃないかなと思いました。

それと、リモートは非常に楽しい授業になるんじゃないかなと期待をするんですが、やはり内海さんもおっしゃいましたように、実際に体験する、物事に触れるような体験も、いつできるかという、やっぱり小学生のときじゃないかなと思うのですね。仮想の世界だけじゃなくて、実際に自分たちが物に触れて、人に触れて、見るという。例えば、学校、地域の中の歴史というか、そういうことを地域を回りながら見てみるとか、さっきのようなごみの処理の仕方を考えるとか、ICTはツールとして使うと聞いているので大丈夫とは思いますが、くれぐれもやはり子供が成長していくために必要な物との対話、接触というか、そういうことのバランスというかな、そういったものを考えながらしていかないと大変なことになるんじゃないかなと思いました。

以上でございます。

【朝長市長】

ありがとうございました。それぞれ貴重なご意見を頂きまして、ありがとうございました。それでは、教育長のお考えはどういったものかお尋ねをしたいと思います。

【西本教育長】

教育長です。

今、児童クラブのお話もちよっと出ました。お許しを頂いて、ここに今、それを担当していただいた子ども未来部長も参っておりますので、その辺、一言お話をお伺いしていただければと思いますが、いかがでございましょうか。

【朝長市長】

じゃあ、子ども未来部長。

【渡辺子ども未来部長】

子ども未来部長の渡辺でございます。

放課後児童クラブを担当しております部署でございますけれども、今回、国のほうが急遽一斉休業ということで示されまして、佐世保市内全体で73クラブの児童クラブがございまして、子供の居場所づくりということで、学校がまず3月4日から24日まで臨時休業があったときに、放課後児童クラブにおいても午前中から開所をお願いできないかという国の通知も来たところであります。

正直、急なお願いでございましたので、私たちも児童クラブにそこをお話したときに、果たしてどれくらいの子供クラブの方が受けていただけるのか、夏休みとか冬休み、春休み、長期休暇については、あらかじめ放課後児童クラブも人

員のマンパワーの手当というのは当然されているのですけれども、今回急遽だったものですから、果たしてどのくらいの児童クラブの方にご協力いただけるかというような懸念もございましたが、大変頑張って受け入れてくださいます、このときは73クラブ、全クラブにおいて子供の午前中からの受け入れをしていただきました。その中でも、小学校におきましても、やはりどうしても配慮を要する子とか、どうしても無理なお子さん、小学3年生以下の子供さんなどにつきましても学校のほうでも受け入れをしていただきましたので、その辺りの連携というのもうまくいったのも一つの理由かと思っております。

その後、またしばらく学校が開いて、さらに22日から5月8日まで、またさらに第2弾というところがありました。これにつきましても、やはり児童クラブにおいても、最初は無理ですよというお話も頂いていたのですが、最終的には67クラブにおきまして、やはり午前中からの開所をしていただいております。

それから、さらにまた学校のほうも延びましたので、5月11日から5月17日まで学校がお休みになるという中では、児童クラブのほうにも私たちもちょっとアンケートをさせていただいたんですけれども、先ほど萩原委員からもございましたように、やはりどうしても支援員が不足していて確保がなかなか難しいと。ちょっと年齢のこともありました、やはり放課後児童クラブに従事していただいている方の中には、ちょっと年齢の高い方もおられますので、ご自身の感染がまた子供にもしかしたら悪影響を及ぼすのかもしれないというようなところで、どうしても支援員の不足、それから、やはり無理なシフトによる疲労をされたということで、なかなか午前中からは厳しいというような訴えがございました。これを続けますと、今後の子供たちの居場所がなかなか確保できないのではないかとということで、教育委員会ともまたご相談をさせていただいて、教育委員会のほうでも、さらに小学4年生から6年生の間もまた学校に来てもいいですよ、どうぞ学校にご相談くださいということをしていただきましたので、この期間はほぼ子供の居場所づくりというのは確保できたのかなと思っております。

今後、第2波ということも懸念されるわけですが、先ほど申しましたように、あらかじめ分かっておりますと、児童クラブのほうでもマンパワーの確保というのにも時間的余裕があればできるかと思いますが、やはり急に来ますので、なかなか今後はちょっと厳しいのかなというような、今、児童クラブからのお話も頂いているところでございます。

児童クラブのほうでも、やはりマンパワーの不足というのと、やはり新年度当初、例えば小学校1年生などが学校に全く行かないまま児童クラブのほうに来ると。例えば、児童クラブのほうでも、当然、お勉強をさせるんですけれども、小学校1年生になったばかりの子に数字を書かせるとか、平仮名を書かせる

いっても、習っていないので書けないとか、そういった戸惑いがあったというようなお話は児童クラブからも聞いておりますので、やはり新1年生の子にとっては、なかなか大変だったのかなという感想を持っているところでございます。

以上でございます。

【朝長市長】

じゃあ、教育長、続けて。

【西本教育長】

それぞれご意見を頂きました。私も今回のコロナ禍にあって長い学校休業ということで、これもおそらく未曾有の経験だったと思いますし、その中でほんとうにいろんな方に支えていただいたという、まずは感謝の気持ちがあります。それから、また、いろんなところに改善点を見出し、反省点もたくさんございました。

ただ、教育の持つ大事な考えというのは、これからは、このコロナに限らず、感染症を含めてどういった不測の事態が生じて学校を休まなければいけないということが起こるかもしれない。そういったことをしっかりと念頭に置いておかなければならないし、まずはこのコロナウイルス感染症と共に共存していく、共に生きていかなければならないということがあるのではないかと思います。

そういった中で、教育の一番大事なところは、どういう環境下においても、どの子供たちも等しく学びを保障してあげる。これをしっかりと守っていかなければ、格差が生じてはいけのではないかとということを感じました。確かに、一人1台の端末機は取組を始めたばかりでございまして、これはもう既にコロナ前の昨年度から補正予算を頂いて、取組を始めた矢先にコロナということになりまして間に合いませんでしたが、もし、それが間に合っていればどうだったのかなという気もいたしております。

それは何かといいますと、やはり一人1台の端末機を持って、もし家庭でそれを使うことができるならば、格差が少なくなったのではないかと気もいたしております。そういった意味では、今後、教育における家庭の在り方、学校の在り方が大きく変わっていく節目の出来事ではなかったのかなと思っております。感染症対策を講じながら、学校における、教育課程における教育をしっかりと確保していく。その手段の一つとして、このオンライン教育、リモート教育があるのではないかなと思っております。

ただ、それは一つの手段であって、それが目的とはならないのではないかと思っております。やはり学校のいいところ、日本の教育のいいところは、ペーパーテストでない部分をしっかりと見取る文化があるということでございまして、学校では担任以外も含めて、日々の努力とか、例えば学級活動、あるいは学校行事への参加とか部活動、そういったものをしっかりと評価するという文化がござ

います。例えば、教室の掃除、給食の配膳とかを一生懸命やる子供についても、しっかりと褒めてあげる。褒める尺度はいろいろあると思うんですけども、先ほど内海委員さんも言われたアナログの部分、こういったところはしっかりと評価をしてやらないといけないんじゃないか。これが日本の教育の強みであって、それを補完する意味でデジタル、いわゆるオンライン授業があるのではないかなと思っております。

オンライン授業というのは、一つのこれからの教育の在り方を支える大きな部分でございますので、そういった場合について、しっかりと我々としても環境を整える必要がございますので、今回も補正予算を急ぎつけていただきましたので、早速その整備を図っていきたいと思っております。

それから、やはりそれを使う先生たちにも意識の改革が必要でございますので、使えない、あるいは使わないという選択はあり得ない。使っていただかなければならないということになってくるかと思っております。これはもう道具の一つというふうに、まず、学校の先生たちの意識を変えて、しっかりとふだんの授業の中に取り込んでいくことが大事ではないかと思っております。そういう意味では、ほんとうに教育委員会に課せられた使命といいますか、負託というのは大きいものがありますので、これもそれぞれの委員さんたちにご意見を賜りながら、今日は総合教育会議でございますので、市長の意見も大いに採り入れながら、今後の教育に生かしていきたいと思っております。

少し残念だったのは、議論の中で9月入学というのが浮上して、いつの間にか消えてしまいました。すぐ消えてしまったのは非常に残念で、明治維新、あるいは戦後、太平洋戦争の終わった後、大きな日本の教育を変える一つのエポックの時期だったんじゃないかなと思うんですが、議論は大いにやってもらってよかったんじゃないかなというのが、私としてはちょっと残念な気持ちがございますが、これもおそらく皆さんの心の中に残っていくと思うので、今後の議論の課題の一つとして取り上げていただくことができるんじゃないかなと思っております。

私からは以上でございます。

【朝長市長】

ありがとうございました。時間も限られているようでございますので、私の総括は最後にお話しさせていただきたいと思っておりますが、あと、補足をする方がいらっしゃいましたら、2回目ということで補足を頂ければと思います。

中島先生、どうぞ。

【中島教育長職務代理者】

最後に教育長にまとめていただきましたので、私はとやかく言うことはないのですけれども、ちょっと一端だけご説示させていただきたいと思っております。今回

のコロナというのは、学校教育をはじめ、これからの学校の在り方というのをほんとうに考えさせる、ある意味いい機会になったのかなと思います。いろんな波紋を残して、組織としてのありようというのをほんとうに問題提起していると思います。全国的に臨時休業というのを余儀なくされて、これからどうあるべきかということは、ほんとうにいろんなところで議論がなされていたということで、非常に貴重だったと思うのです。

ただ、一つの共感として私が個人的に思うのは、持続可能な社会とかよく言われますけれども、組織として成長していくための必要条件というのは、この学校もそうなんですけれども、リスクを分散させてヘッジ、いわゆる安全装置というのをかけておくと。そのヘッジのための資源としてのネットワーク、これが一番大事なのかなと思っています。

公立学校もいろんな制限とか制約があるんですけれども、これからのいろんな高リスクな社会の情勢になって、やっぱり当てはまる部分も大きいと思うんですよね。既成の概念であるとか枠組みを超えて、やっぱり新しい発想で柔軟に展開していかないと、なかなか存続というのは難しいと思います。特に今いろんな問題が横たわっているわけですが、教職員の働き方改革でありますとか、今まさに進んでいますGIGAスクール構想、こういったプロジェクトの推進というのも当たるんじゃないかなと思います。公立学校と私立学校、民間の企業、他都市、他郡市ですね、異分野と枠外というのがそれぞれの強みを持ち寄って、弱点を補い合って、役割分担をして、よりいいものをつくり上げて行って、成果を共有する。それがこれからのオール何々チームの考え方なのかなと考えております。

小さな範疇の中で先を争う必要はないと思うんですよね。特に公立学校というのはスムーズに広く普及、浸透させることが非常に大事だと思うんです。先ほど陣内部長さんの説明があったんですけれども、やっぱりキーワードは、公立学校というのは全ての児童生徒だと思うんですね。くしくも先般の市議会の一般質問の中にも、西本教育長はこの学力保障の問題についてやったんですけれども、子供たち誰一人を取り残すことなく学びを保障する、これがやっぱり第一義だと思うんですよね。

だから、社会の進展によって学校に求められる役割というのが変わってきます。やっぱりいろんなところで、今、学校が作りたい大人と社会が求めている大人というものの乖離が大きいというご意見もありますし、日本型学校教育と言われる、いわゆる知育、徳育、体育をセットで請け負う現在の路線というのは、やっぱりもう疑問視するような声もあります。これからもこういったものについては、幅広い年代層において議論を深めてほしいと思います。

結局、私の個人的な考え方ですけど、学校の存在というのは、その学びに動機

と目的を与えること、共に学びたいと思う環境を提供すること、極めればこの二つじゃないかなと思っています。そして、この営みですね。この崇高な営みに携わる全てのスタッフが、いろいろな道具を持ち寄ってオール何々で立ち向かってこそ、その使命というのを果たすことができるのかなと思っています。

すみません、以上です。

【朝長市長】

ありがとうございました。あと、どうぞ、それぞれ。合田先生、順番に。

【合田教育委員】

最初、今日、コロナウイルス禍の中の教育というテーマを事務局にお伺いしたときに、合田委員はもう医療従事者として学校の衛生というところを話されますよねと言われましたので、そこら辺をお話しさせていただいて結びたいと思います。

ずっとお願いしてきたエアコンが幸いにも昨年度中に全校設置されたことで、そして、もともと扇風機がありましたから、それを併用することでコロナの予防に一番大切な換気を行いながら、なおかつ快適な学習環境の中で子供たちが夏休み短縮でも勉強ができる、これはほんとうによかったかなと思っています。

ただし、学校の現在の衛生環境とか、あとは手指衛生のスキルに対しては、大きな課題があると、私自身、思っております。

特に換気に対しましては、学校訪問の折に私はずっと指摘をさせていただいていることが一つございまして、子供さんたちの作品を先生方はやっぱり見てほしいんですよ。たくさんの方に見てほしいから、廊下側の窓まで全部使って掲示をされるんですよ。でも、それは2方向——双方向の換気ができないので、特に低学年の教室はやめてくださいというお話をしてまいりました。でも、先生方の教育に対する思いや子供たちに対する熱い思いは、そういう掲示にかかっているのであって、ここが今日何度も出ている先生方の意識改革が必要になると思っております。

また、今回大きな問題になりましたが、医療現場でも不足している資材の確保ですね。あれだけ大人数の子供たち、そして先生方に必要な数のマスク、アルコール消毒液、そして体温計の確保ですね。これはこれからずっと見据えて、常に確保をしておかなければならないと感じています。

また、手洗いの問題です。人数に対して、学校の洗面台というのはどうしても数が少ないです。しかも、これだけ水不足と言われる佐世保市において、手を洗うときも、一度流水で手をぬらしたら、止めて多分石けんをつけて洗うように指導がされていたと思います。しかし、それは効果的な手洗い方法ではなく、医療現場では水はもう出しっぱなしの中で手洗いするというのが鉄則ですので、これを限られた休み時間に効果的に児童生徒が全員手洗いをする。これは、なかなか

か難しいのではないかなということも危惧しております。

また、物品の衛生管理の問題でございます。今まで私自身も小学校、中学校、高校、看護学校で教室の掃除はしてきましたし、子供たちの掃除風景を今でも目にすることがありますが、例えば机の拭き方ですね。皆さん、机をどういうふう
に拭かれているでしょうか。台を拭くとき、どう拭かれますか。おそらく多くの
方が往復で拭かれると思うんです。これは菌やウイルスをただまき散らすだけ
なんですよね。私たち医療従事者というのは、絶対に往復拭きは致しません。必
ず一方向に拭いて、面を変えて、また同じ方向に拭く。これを徹底しています。
こういう医療従事者として常識であることを、今度は一般の方にも常識として
新しい生活様式に取り入れなければならない。このように考えています。これを
指導する場が学校なのかな。学校の清掃活動の中でそれが大きな役割を果たす
ことになるのではないかなと期待をしているところです。

よく靴の裏についたコロナウイルスは72時間生き続けると言います。です
から、私どもは、病院で仕事をした後の靴は絶対に家庭には持ち込みません。で
すから、学校で1週間履いた靴やシューズをきちんと子供たちが家庭に持ち帰
って、確実に洗浄をする。そういった声かけなども、これからはさらに必要にな
ってくるのかなと思っております。

学習方法に関しても、主体的な学びを進めていく上でグループワークが大変
多いんですけれども、3密を避けるということで、このグループワークがなかな
かできずにお困りの先生方も多いかと思っております。

私たちはエッセンシャル・ワーカーだからと何か最近とてももてはやされて、
すごく面映ゆい気持ちでいっぱいなんですけれども、それでも第2波に備えて、
まだ私どもは県外に行くことは許されておりません。また、県外の人と会うこと
も許されておりません。また、家族以外と食事をすることも許されておりません。
食事のときは、全員が壁を向いて、一言もしゃべらずに昼の休憩を取っている状
況です。それでも、第2波を抑えて、そして画面でしか見えない、佐世保から出
ている息子と早くリアルに会って、また今までどおりの生活を、ちょっと新しく
チェンジして生活できるように待ち望んでいるところです。

以上です。

【朝長市長】

ありがとうございました。内海先生。

【内海教育委員】

合田委員の話を聞いて、最近、出歩いている自分を反省しております。福岡、
熊本、いろいろ行っております。接触はできるだけ避けているんですけど。

ピンチはチャンスとよくみんな言うんですけど、今回は、やっぱりピンチはす
ごいピンチだと思うんですね。私も社長になって31年なんですけど、2月に旅

行のキャンセルが続いて返金、返金、返金、バスもキャンセル、キャンセル、キャンセル。はい、売上げは今ゼロが3か月続いています。もう社長を辞めたいです。しかし、その中で前に進んでいくしかないということで、いろんな気づきももらっていると思っています。教育もそうですし、社会も経済もそうだと思うんです。もうこの状態を理解して前に進んでいくしかない。要するに、これが画期的に元に戻るといったことはないと思ってしまえば前に進めるなということを感じました。

I C T、要するに学校でパソコンを使っていろんな授業をしていて、学校訪問をすると、確かに大きな画面があってパソコンがあるんですけど、それをほんとうに使いこなしている先生が1,500人のうち何割かなと思うと、私は学校訪問してみても思うのは少ないと思います。ほんとうに2割か3割かもしれない。ただ、今後はもう絶対、先生には1,500人全員にこのリモート授業をやらしてもらわないといけないという絶好の、これはピンチがチャンスになると思います。

それと、もう一つ、私はよかったなと思うのは、2月、3月に高校生が免許を取りに来たときに、みんなスマホを持ってこうやっているんです。メールアドレスを持っていなくてもコミュニケーションができるという。

しかし、大学生を見たときに、先ほど言いましたようにパソコンでコミュニケーションを構成していつている。世界のスタンダードはやっぱりパソコンだろうと思うんです。それが逆にスタンダードに切替えていかざるを得ない。スマホがノーとは言いませんけども、やっぱり使いこなしていく。パソコンを使いこなして、高校、大学、それから社会人になって、世界とグローバルな仕事ができるような環境にするには、今回、私は絶対チャンスだと思っておりますので、いいほうにいいほうに捉えていければと思っています。

最後ですけれども、ビジネスをやっていると、いろんな給付金が出るんですね。残念ながら50%以下じゃなかったんで、大きな200万円はもらえなかったんです。しかし、どこの給付金よりも一番最初にお金を頂いたのは佐世保市からです。貸切りバスに対する助成金はどこよりも早かった。それを言って終わりにします。

ありがとうございました。

【朝長市長】

どうもありがとうございました。それでは、萩原先生、お願いします。

【萩原教育委員】

私はもうほとんど申すことはございませんが、このコロナのおかげで、春からこの夏にかけて、新しく教育委員になったんですけれども、何一つ行事や学校訪問ということが何もできずに今ここにおりますので、ほんとうに残念だったなというような気持ちでいっぱいでございます。

だけど、こういうコロナとかいう突然のウイルスというのは、まだまだこれからひょっとしたらあるかもしれないし、これがいい教訓となって、児童クラブの方もおっしゃっていましたが、消毒薬とかマスクとか、そういうものがないから、自力でドラッグストアに並んだんですよというようなこともおっしゃっていたので、市と、それからいろんな学校と、必要なものはちゃんとそろえる。人間も含めて、いろんなものはもう整備していかなければならないことがほんとうによく分かったんだなということを思いました。

それと、家庭生活でちょっとと思うんですが、困窮した家庭でほんとうに職をなくした方々、独り親の方々、そういうふうな方々の家庭で、ほんとうに子供たちがどういう時間の使い方をしていたのか。それから、ほんとうにご飯が食べられていたのか。何かそういうところは、学校訪問とかをしていないので私は分からないのですが、きっと上に上ってこないところではいろんな悲惨なことがあっていたんじゃないかなということも思いますので、子供の状況というのは、くれぐれも先生方含めて、いろんな方々が情報交換するなり、しっかりと把握して向き合っていてあげなきゃいけないんだなということを感じております。

以上でございます。

【朝長市長】

ありがとうございました。それでは、教育長、総括をお願いします。

【西本教育長】

ほんとうにいろんな方に支えられて、このコロナ禍の教育というものを過ごさせていただきました。学校施設にとどまらず、体育施設、スポーツ施設、図書館をはじめとする教育施設も閉鎖することになりまして、ほんとうに市民生活に大きな影響を与えたということが一つあります。冒頭申しましたように、これが当たり前になるかもしれないということを常に頭に置いて、今後の教育並びに社会教育も含めて対応を検討していきたいと思っております。

私からは以上でございます。

【朝長市長】

ありがとうございました。それぞれに今回のコロナの問題につきまして、民間の状況はほんとうに大変だったと思いますが、学校現場でも皆さんそれぞれ頑張っていた。そしてまた、放課後児童クラブ、今日は渡辺部長も来ておりますけど、非常にみんなで何とかしようというようなことで頑張ってきているのではないかなと思っています。

そういう中で、今日それぞれのご意見を頂きました。反省点も頂きましたし、今これからこのピンチをチャンスに変えようじゃないかというご意見も頂きました。学校の在り方自体を今までと形を変えてスタートをさせるいいチャンスになってきているんじゃないかなと思っています。なかなかこれまで取り組

めなかった、これまでの日本人の滞留でいいんでしょうか、日本の成功体験の下にいろんなものがつくり上げてこられていましたので、政府もそうだと思いますけどね、今回の給付の問題も含めまして、日本のシステムは非常にいいんだというような思い込みがあったんじゃないかと思います。そういう中で、諸外国におきましては、やはりICT化というものが我々が考える以上に進んでいたということじゃないかなと思います。

そういう中で、これを取り戻していくためには、やはり今回のGIGAスクールということにつきましては、非常に時宜を得たものになってきているんじゃないかなと思いますし、私どもといたしましても、成功体験ではなくて、ほんとうにこれからゼロから始まるんだと、まさしく戦後の日本の中でみんなが努力をして頑張ってきた、そういう形というものをもう一度思い浮かべながら、そして、子供たちにもやはりそういう厳しさ、つらさというものも経験させて新しい取組をしていく、そういうものを植え付け、学んでもらう非常にいいチャンスじゃないかなと思っております。

今回の、特にリモート授業等につきましては、道具はそろえられますけど、しかし、実際に教える人たちができるかどうかということが非常に課題だと思っております。1,500名の先生方がどう使っていただくか、どういう活用をしていただくかということが一番大事なことだと思っております。もう待たなしというふうなことで先ほどからお話ございましたので、その待たなしをどういう形でですね、今までは先生、仕方ないよねというようなことで、もうできない先生は仕方ないたいと。もうそのやり方でやってもらわんばたいというようなこともあったと思いますけれども、今回はもうそれが許されない、そういう状況になってきているのではないかと思いますので、学びの保障という言葉もございましたが、そういう意味で、ぜひ全ての先生方が活用できるような環境を整えていただきたいと思います。

この前も、ちらっとそういう話をしたんですけど、やはりどうしても苦手意識を持っておられる先生方には、特別な授業参加ができるような、そういう機会をつくっていただくことが必要じゃないかなと思っております。全員集めて同じことを何回も繰り返すのではなくて、進んでいる先生方はもう受ける必要がないと思うんですよね。それで、やはりどうしても苦手意識を持っておられる方は、何回もそこで受講ができるような、そういう場づくりをしていくことも必要じゃないかなと思っております。やっぱり人間ですから、1回ではできないけど、10回やればできるよねというようなことにもなってくるんじゃないかなと思いますので、ぜひ補習の場をつくっていただくことができればと思いますので、考えていただければと思っております。

それから、合田先生からございましたが、衛生設備等に関しましては、非常に

まだまだ十分じゃないところがあると思っております。これは今後の課題として捉えていかなければいけないことだと思っておりますし、今回の物資の不足ということに関しましては、全国全て集中をしたということで、まさしくトイレットペーパーと同じような状況にもなってきたんだと思います。一つの流れの中で、皆さん必要なものは必要だというようなことで一定そろえていらっしゃると思いますので、今回みたいなパニックは起こらないんじゃないかなと思います。しかし、それぞれの学校でも一定の備蓄をすることも必要じゃないかなと思いますので、そういうことも含めて、私どもは準備をする立場でございまして、やっていくようにしてまいりたいと思っております。

それから、あと、今後のことの中で、第2波が来たときにどうするかというようなことが出てくると思います。前回の第1波のときみたいに全校休校、休業というようなことは果たしていいのかどうかということも出てくるのではないかなと思います。岩手県はゼロだということであったわけですが、岩手県も全部休業しなきゃいけなかったというようなことがございましたね。そのようなことで、やはりケース・バイ・ケースというのでしょうか、それぞれの何回でもという判断をしていかなければいけない。

例えば、インフルエンザのときに、スタートは学級閉鎖ということから始まって、それから学校、そして、またさらに大きいときは地区・ブロック、あるいは学区全体というようなことになっていくと思いますが、やはり全体を一気にやるには大変なエネルギーが要ると思いますし、また、マイナス面も出てくると思っております。経済面につきましてもそうだと思いますので、まさしくwithコロナということと言われるわけでございますけれども、今後こういうコロナというものは、やむを得ないんだというようなことの中で生活をどうしていくのか、経済をどうしていくのかというようなことを考えて、そして実践していかなければいけない、そういうときだと思いますので、教育の世界におきましても、それが言えるのではないかなと思っております。

正しく理解をしながら、そして正しく行動をしていくということ、これがこれから私どもに課せられた大きな使命だと思いますし、また、市民の皆さん方それぞれに啓発をしていく必要があるんじゃないかなと思っておりますので、ぜひご協力を頂くことができると思っております。

以上、私の総括ということになるのかどうか分かりませんが、私の意見ということでご理解いただければと思えました。

ちょうど時間になってまいりましたので、ここで締めさせていただきますと思いますが、ほかにどうしてもここは言っておきたいというようなことがございましたならば、一言それぞれおっしゃっていただければと思っております。何かございませんでしょうか。

【全委員】

ありません。

【朝長市長】

ないようでしたら、以上をもちまして、第1回総合教育会議を終了させていただきます。どうもありがとうございました。

【松尾総務課長】

ありがとうございました。以上をもちまして、令和2年度第1回総合教育会議を終了いたします。どうもありがとうございました。

----- 了 -----